

医院の定期健診率を高めたPMTC



神奈川県川崎市・須貝歯科医院
西原正弘 須貝昭弘

患者さんの口腔の健康を考えた時、リコールシステム、いわゆる定期健診が重要であることは言うまでもありません。歯や歯周組織に対する定期的な評価と予防処置を施すことで、異常や疾患に対して早期に対応することが可能になり、また、セルフケアの足りない部分を補うこともできます。しかし、当医院でも定期健診の重要性を説明し、リコールはがき等を出していても、こちらの思い通りに定期健診率が上がらないことに悩んでいました。

なぜ長続きしなかったのでしょうか？そこにはリコールにおいて患者さんが苦痛や不快感を感じたり、また、十分なメリットがないと判断されている可能性があります。医院側のシステムの欠陥であるとも言えます。たとえば、歯科医院側が考えるプラークコントロールのレベルと、患

者さん側の考えるそれとは大きな差があるのも現実です。患者さん個々にプラークコントロールのレベルと限界が存在することを認識する必要があります。リコールの度にブラッシングの不備を指摘し続けることは、患者さんに苦痛を与えることにつながり、やがて歯科医院はイヤな所というイメージを持たせる結果になりかねません。

また、完璧に近いプラークコントロールで来院する患者さんには何もすることができないという逆の悩みもありました。多様な患者さんに無理なくリコールに応じてもらうには何が必要かを模索していた時期にPMTCの概念が紹介されました。見よう見まねでPMTCを定期健診時に応用しはじめると定期健診率が高くなってきました。PMTCの科学的根拠はもとより、患者さん

が爽快感や気持ちよさを実感することによって、自らの口腔衛生に対する意識の向上、さらにはリコールへの動機づけ効果が得られたものと思われます。その後、当院では歯科衛生士がPMTCの講習会などに出席し、PMTCを「リコールシステムに必要不可欠なプロフェッショナルケア」と位置づけて日常臨床に定着させています。保険医療制度においても「かかりつけ歯科医」としての役割が重要視される昨今、PMTCを継続的な患者管理システム(リコール)を支える柱の一つとして行っていく意義は高いと考えます。

以下、PMTCを導入することによりリコールが継続し、健康な口腔内を維持している症例を紹介しPMTCの重要性について述べてみたいと思います。

症例1



1
1
歯肉の腫張と出血を主訴に来院された20代の女性。単なるプラークコントロール不良による歯肉炎と診断し、初期治療を行った。(1989.8)



1
2
年齢が若いこともあり、短期間の初期治療でかなりの改善がみられた。プラークコントロールも良好になってきたのでメンテナンスに移行したが、メンテナンスの重要性の説明やリコールシステムには不備があった。(1989.9)



1
3
その後、リコールが途絶え、4年半後に再来院された時には歯周疾患が増悪していた。一時、治癒したように思われた症例でもこのように再発してしまえば意味がない。PMTCを柱とするリコールシステムが確立していなかった時期である。(1994.4)



1
・
4

ふりだしに戻って初期治療から開始。医院のシステムも確立してきていたのでモチベーションも含め慎重に対応した。(1994.7)



1
・
5

PMTCを見よう見まねで始め、その成果が定期健診は続き患者の健康観が変化したように思われた。しかし、実際には医院側のシステムの改善が一番の原因である。歯肉の状態は良好に維持されている。(1996.6)



1
・
6

しかし、下顎前歯に深い歯肉退縮が残ってしまい、患者から知覚過敏や形態異常、ブラッシング時の疼痛などの訴えがでてきた。(1996.6)



1
・
7

それらの症状を改善するために結合組織移植術を行った。定期健診が持続されブラークコントロールが良好に維持されていなければ行えない術式である。(1996.6)



1
・
8

歯肉の厚みがなく難しい症例だったがある程度の改善が得られた。(1996.8)



1
・
9

3年後の前方面観。当院のPMTCを取り入れたリコールシステムも確立し、患者さんは定期的なリコールに応じている。(1999.1)



1
・
10

結合組織移植術を施した下顎前歯部も問題なく経過している。(1999.1)



1
・
11

リコール時にはPMTCを応用し全顎的にクリーニングを行っており下顎前歯部舌側もこの程度に仕上げている。



1
・
12

しかし、4ヶ月後には再び歯石沈着を起こしている。これがこの患者さんのブラークコントロールレベルであり、それを受け入れることも重要である。足りない部分を医院側で補うという共同作業が必要であり、定期的なリコールと管理の重要性をあらためて実感する。



1
・
13

当院のリコールシステムの中で行っているPMTC。終了後はかなりの清潔感・爽快感が得られるためにモチベーションにも有効であると考える。



1
・
14

6年後の前方面観。定期的なリコールと管理が継続されている事により、健康的な口腔環境が維持されている。(2002.9)



1
・
15

歯周外科を施した下顎前歯部も問題なく経過している。(2002.9)

症例2



2
1 初診時51歳の女性。初診時の前方面観。衛生状態は悪く多量の歯石沈着と歯周疾患、残根、欠損の放置など多くの問題を抱えていた。(1993.7)



2
2 上顎咬合面観。臼歯部の欠損は放置され前歯部の歯列不正により口唇の閉鎖不全なども生じていた。



2
3 下顎咬合面観。歯石沈着、残根、欠損などがあり、あらゆる機能不全があった。



2
4 初診から2年後、全顎の治療は終了したが、この状態を維持できなければ意味がない。初診時の状態から考え、患者さんの健康観を刺激しながら治療中からメンテナンスの重要性を説明していた。(1995.8)



2
5 上顎前歯部はすべて歯冠補綴を行い補綴的に歯列不正の改善をした。上顎犬歯に歯冠外アタッチメントを応用した。



2
6 下顎前歯部にはブリッジを装着。残存歯は極力保存した。



2
7 最終補綴より7年後の前方面観。若干の歯肉退縮が起こっているが歯周組織および補綴物も良好に維持され機能している。患者さんの希望により2ヶ月ごとのPMTCを応用したリコールと管理が現在も継続されている。(2002.10)



2
8 上顎咬合面観。義歯の修正などの必要もなく良好に機能している。



2
9 下顎咬合面観。



2
10 PMTCに加え毎回の定期健診で義歯の超音波による洗浄も取り入れている。ジーシー社製クイックデンチャーを使用。



2
11 義歯表面のステインが除去され、金属部分の光沢も得られる。洗浄後の装着感是好評である。



2
12 上顎犬歯の歯冠外アタッチメント。プラークコントロールの難しい部分であるが良好にメンテナンスされている。



2
13
もし問題が見つければその都度適切な対応がのぞまれる。定期健診時にPMTCを行うことで患者が何のために来院しているのかの目的意識がはっきりする。残存歯へのフッ素塗布による根面カリエスの予防も重要である。



2
14
下顎前歯部のブリッジではポンティック基底部の清掃が重要である。患者側の不足分はPMTCによるプロフェッショナルケアで補っている。



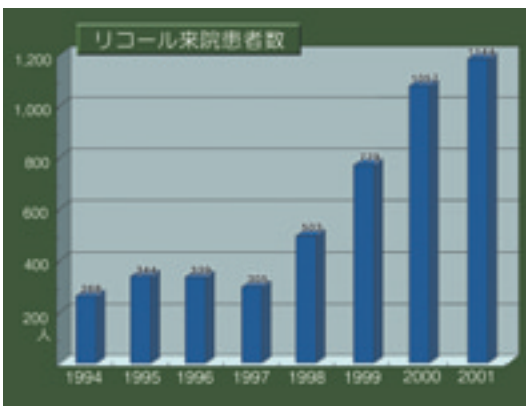
2
15
当初より抜歯を前提に補綴設計を行いながら保存した下顎右側第二大臼歯であるが、リコールの度に要チェックである。



2
16
予想以上に長期間保存できていたが5年後のリコール時にはカリエスが認められた。



2
17
定期的管理がなされていることで早期発見・早期治療が可能となる。カリエスに対しては充填処置で対応した。



2
18
PMTCを導入し始めた1996年頃から年間の延べ定期健診患者数は増加してきている。PMTCが患者の定期健診の動機付けとなっているのは間違いなく、患者側の健康観の変化というよりも医院側のシステムが重要であることを物語っている。

まとめ

定期健診率を高めるためには、医院側が患者さんにどうアプローチするかが大きく影響してきます。リコールで受診した際に、何も問題がないからといって、医院側が何もしなければ患者さんにとって意味の

ないものになってしまいます。リコールシステムにPMTCを組み入れることで患者さんに対して予防の重要性を再認識させるとともに、再度定期健診に来院しようという動機付けにもなります。良い結果につながるこ

とが実感されれば、自然とリコール率は高まるものと思われます。予防という概念を中心に据えたリコールシステムにおいて、PMTCを取り入れていく価値は今後ますます重要になると考えています。